

# 草創期から成長期を目指して

## Aiming from early period to growth period

作田 裕美

Hiromi SAKUDA

大阪市立大学

Osaka City University

2012年5月に誕生した日本放射線看護学会は設立後7年が経過し、学会誌も第7巻の発刊を迎えることになりました。

学会が公共的な存在として認められるには学会誌の存在が重要不可欠です。学会が学術雑誌を刊行し（議論の場を持ち）、議論を深めることで当該分野の学問の水準を上げることにつながるからです。誕生まもない学会の場合は、学問水準の向上というよりは、その学問の専門性の確立に果たす役割が期待されるものと考えます。既刊の6巻を紐解きますと、各巻ともに、「医療用放射線利用に伴う看護」と「被ばく医療における看護」がバランスよく掲載されていることに気付かされます。まさに、草間理事長の言う「放射線看護学は『放射線防護学』と『看護学』を融合させた学際的な学問である」を、端的に表した現象が学会誌に立ち現われておりました。学会誌のページをめくりながら、放射線看護臨床に携わる看護師と放射線看護学研究者の関心が、今後どのような方向性と深化を辿って、実践の学問である放射線看護は10年後、20年後の学会誌にどのような姿を見せてくれるのだろうか、しばし不思議な空想に浸りました。学問的関心もさることながら、この不思議な空想もまた、学会誌のもつ味わいと言えるのかもしれません。

日本放射線看護学会の誕生は、「日本の放射線看護の現状を何とか良くしたい」と強く願った先駆者たちの炎のような情熱の賜物であることは、既刊の巻頭言に如実に表れております。第2巻の小西恵美子先生にはじまり、草間朋子先生、西沢義子先生、浦田秀子先生と、錚々たる先達の想いの強さと行動力が日本放射線看護学会誕生の礎であったと感謝の念を禁じえません。同時に、次代につなぐ責任をあらためて重く受け止めました。

日本放射線看護学会をめぐる直近の朗報として特筆すべきは、2018年4月2日をもって任意団体から一般社団法人化したこと、2016年に放射線看護の高度実践看護師教育課程（専門看護師）の分野認定がされたこと、2017年10月文科省が提示した看護学モデル・コア・カリキュラムに放射線看護が取り入れられたこと等があげられます。ことに、看護学モデル・コア・カリキュラムによって学部教育に放射線看護を盛り込むことが提案されたことは、放射線看護学に携わってきた関係者にとっては長年の悲願であり、また、2011年3月の原子力発電所事故以降、放射線被ばくに関する看護基礎教育の必要性はすべての看護に携わる者の焦りにも似た共通認識でした。これを好機に、看護学教育の過密なカリキュラムのなかに、放射線看護学が効果的に展開されるように努力していかなばならないと強く感じているところです。基盤となる学部教育があってこそ、以降の高度実践看護師教育課程の専門性へとつながるものであり、提案を運用する各教育機関のカリキュラム構築が大いに期待されるところです。

doi: 10.24680/rnsj.7.1\_1